



紺 碧

調布稲門会 会報

2018.6 第48号

年2回(1月、6月)発行

事務局 〒182-0022

調布市国領町 7-56-14

Fax 042-489-6507

E-mail toumonkai@gmail.com

URL (HP) <http://chofu-tomon.jimdo.com/>

編集責任者 高原浩 柵木真也



福祉ボランティア特集 地域社会貢献活動—福祉ボランティア分野でも本格化！

調布稲門会では地域社会貢献活動として年末の市福祉バザーや春、秋の多摩川/野川のクリーン作戦などに参加して大きな成果を上げていますが、最近では本格的な福祉ボランティア活動にも領域を広げています。今号ではそんな活動を牽引する同好会「ボランティア・ネットワーク (Bor・n)」の動向を中心に特集記事を組みました。少しでも関心を高めて頂けたらと思います。(編集部)

冒頭のワイド合成写真は五十嵐眞会員制作

子供たちとの出会いから生まれる不思議なパワー

ボランティア・ネットワーク Bor・n

代表 坊野美代子(稲門会会計幹事、昭53教育)

Bor・nでは都立調布特別支援学校を支援する「リソース・ネット」(注1)と連携して、障害のある子供たちとの触れ合い、ボランティア(注2)体験を企画しています。平成30年度の活動は別表(次ページ)のように国際交流など様々なイベントを交えて活発に実施する予定ですのでぜひ多くの方の御参加をお待ちしています。

さて私が、障害のある子供たちと出会ったのは昭和52年。養護学校(名称当時)で教育実習を行ったときです。教育心理学専修では、中高の社会の教員免許

のほかに、養護学校教諭1級という、当時の私学では珍しい免許が取れました。2週間の教育実習を終え、残った思いは「楽しかった!」。この出会いから、(自分としては)全く想定していなかった、教員の道を歩むことになりました。以来37年間、都立調布特別支援学校を校長で退職するまで、障害のある子供たちの教育に携わってきました。



笑顔、笑顔の国際交流イベント

振り返れば、良かったこと、楽しかったことしか思い浮かびません。子供たちに癒され支えられ良き半生を送ってこられたと心から思えることは幸せです。

支援学校の子供たちは、障害から言葉で意思を伝えることがうまく出来ません。しかし触れ合っていると、子供たちの中にたくさんの気持ちや考えがあることが伝わってきます。言葉によらないコミュニケーションがあるのです。別の言い方をすれば「言葉で飾らない」関係ができます。優劣を超えた「気持ちや思い」をやり取りするのです。子供たちが持つ不思議な力(パワー)をこの教育に携わる多くの教員が感じています。この感覚を一人でも多く分かち合いたい、伝えたいと切に願っています。

平成30年度 Bor・n の活動

- 6月9日(土) 余暇活動支援「写真教室」
- 7月14日(土) 余暇活動支援「世界からこんにちは」
- 7月27日(金)「ちょうふの風」ボランティア
- 11月・日時未定 Bor・n「発達障害講演会」
- 12月8日(土) 余暇活動支援「調布まつり」
- 2月9日(土) 余暇活動支援「バレンタイン・コンサート」
- 3月・日時未定 Bor・n 懇親会

Bor・n は共生社会の理念体現化を目指す

なぜBor・nを作ろうと思ったのか。一言で言えば、共生社会の実現を目指すため、。障害のある人もない人も、お互いの人格と個性を尊重しながら、共に暮らす地域社会が理想であり、共生社会の理念です。

ボランティア・ネットワーク Bor・n は、私たちの地域に住む障害のある子供たちへのボランティア活動を通して、「街で会ったときに自然に接することができる、笑顔ですれ違える、少し困っていたら手助けができる」、そんなさりげない関わりができる自分でありたい、そんな人が多く住む街になって欲しい、との願いをもって調布稲門会の同好会として活動を始めました。

様々な社会的障壁によって、障害のある人たちが不利益な扱いを受けることがまだ多くあります。平成28年4月、「障害を理由とする差別の解消に関する法律」が施行されました。大きな前進ですが、なに

よりも大切なことは、「心の障壁」を解消すること。私たち一人一人が、できることをできる時に。まずは障害のある子供たちのことを知るところから。

(注1) リソース・ネットについて

水戸和幸(リソース・ネット代表、電気通信大準教授)

本組織は2009年10月に、都立調布特別支援学校と電気通信大学の教育連携協定を機に設立されました。目的は調布特別支援学校の児童・生徒の安心で豊かな生活を応援することです。障害理解をテーマにした公開講座、子供たちとボランティアが交流する余暇活動イベント、地域と連携した防災訓練などを展開しています。共生社会の実現に向けて、皆様のご参加をお待ちしております。

(注2) ボランティアとは、...

単なる無報酬の奉仕活動という意味ではなく、自己の自発的・主体的な意思によって社会問題の解決や必要とされている活動を理解・共感し、勤労とは別に労働力、技術、知識を提供すること。

知的障害児童の放課後活動支援に取り組む

NPO 法人ちょうふの風

施設長 嶋田浩一(稲門会幹事、平2教育)



私は国領で知的障害児童の放課後活動を支援する施設 NPO 法人「ちょうふの風」の施設を運営しています。また障害を持つ成人の福祉作業所「ポピーの家」の運営にも携わっていて、障害のある方たちのほほ一生と向き合うという活動をしています。

Bor・n との関係では、このうち「児童」の夏休み活動のサポートをお願いしています。昨年は4の方に参加して頂き、渋谷の「NHK スタジオパーク」で子どもたちとの楽しい時間を通し「障害児ボランティア」を体験して頂きました。今年も多くの方のご参加を期待しています。また障害分野ではないですが、毎月「子ども食堂(写真上)」も主催。こちらは「ボランティアは初めてで」という方でも比較的入り易い活動ですのでぜひ体験してみてください。

福祉ボランティア特集**「寺子屋ボランティア構想」にも学生の反応**

副幹事長 涌田みちる(昭58理工)

3年前の幹事会で、経済的に厳しい状況に置かれている子供の学習支援を目指す「寺子屋構想」を進めようということになりました。まず他の稲門会の実例として西東京稲門会の「稲門寺子屋」を視察。また調布市の子ども生活部の幹部と懇談し、市の「子ども・若者総合支援事業“ここあ”」に協力の意向を伝えました。その第一歩として“My Waseda”のネットを

2018 総会**会員・来賓 80 人余が出席、賑やかに開催—第 37 回総会****ドリアン助川氏の記念講演、初めて一般公開、ほぼ満員(定員 200 人)の盛況ぶり(編集部・高原)**

2018年5月19日(土)、2018年度(第37回)定期総会が午後2時過ぎから調布市文化会館「たづくり」で開かれました。総会は8階の映像シアター、またそれに続く記念講演・懇親会は12階大会議室の2会場を使い、総会には会員・準会員62人と、長友貴樹調布市長、大学本部、調布三田会や近隣の三多摩支部稲門会の来賓20数人の計80人余が出席、盛会となりました。

総会では岡田文男会長が「今年は東京三多摩支部大会の主幹幹事稲門会の大役があり、皆さんよろしくご協力を」と挨拶、続いて2017年活動実績報告/収支決算および監査報告、2018年活動計画/予算計画/役員および幹事人事案など議案を賛成多数で可決しました。

総会后、12階の大会議室に全員移動して作家ドリアン助川氏の記念講演「私たちはなぜ生まれてきたのか?小説「あん」でハンセン病回復者の人生を描いた意味」を聴きました。同氏は早大卒業生で、校友会誌「早稲田学報」の連載コラム「ドリアン助川の在野で行こうぜ!」を持っています。京王線つつじヶ丘駅近くに事務所を持ち、調布とも縁が深い人物です。

講演は初めて市民への一般公開となり、山田和子副会長ら稲門会メンバーによる調布市民への積極的なPRも手伝ってほぼ満席(定員200人)となりました。ドリアン氏の卒業時の就職難の経験や職を転々とした後、放送作家として独立し、長年のテーマとし

介して調布市在住の早大生に“ここあ”でのボランティアを呼びかけましたが反応はありませんでした。

反響のないまま1年以上が過ぎた昨年7月、加藤勝信内閣府特命担当大臣(現厚生労働相)が調布市を訪問し、“ここあ”を視察した際、ボランティアの大学生と歓談の場にいた早大生が“My Waseda”の呼びかけでボランティアを始めたと言ったと、市の担当者から感謝の連絡を頂きました。

一歩ずつですが、できることから取り組み、今後、支援の活動を広げていきたいと考えています。

で温めてきたハンセン病元患者の境遇を小説にするまでの経緯を、洒脱に滑らかにそして熱く語り、聴衆の共感呼びました。重いテーマながら「生まれたこと自体意味のあること」をキーワードに、人間とは何かを説得力ある言葉で語りかけました。(講演要旨は別項参照)

講演の余韻冷めやらぬ会場を、急いで模様替えして今度は懇親会。いつもお世話になっている正直屋グループさんの出張レストランのサービスで、寿司をはじめ和洋中盛りだくさんの料理に舌鼓を打ちながら、出席者は話に花を咲かせました。今年は早稲田大学応援部リーダー(男性1人、女性4人)をお招きし、檀上でスポーツ応援さながら、応援歌に合わせて飛んだり跳ねたりの演技は圧巻でした。(写真下)



宴もたけなわとなり、嶋田浩一幹事が年季の入った「第二校歌 人生劇場」の口演を披露してやんやの喝采を浴びました。終幕が近づいた午後7時前、締めくくりの校歌大合唱でお開きとなりました。

2018 総会

講演『私たちはなぜ生まれてきたのか？』

小説「あん」でハンセン病回復者の人生を描いた意味

作家 ドリアン助川氏(昭62文) <関連記事=女性の会「多磨全生園見学」>

「あん」という物語は、ハンセン病問題が背景になっている。私たちはなぜこの世に生まれてきて、生き抜くのか。それが大事なテーマになっている。

私は色弱だったためにテレビ局も、出版社も、新聞社も受験不可。大学4年の春に社会から門戸を閉ざされてしまった。悩みに悩んで、もう就職はしない、一人で物を作って生きていくと決めた。そしてフリーの放送作家になった。その後、深夜放送で中高生向けの番組パーソナリティーをした。中高生に生きる意味は何か、と問うたときに十人が十人、社会に役立つために生まれてきたと答えた。私は寒いものを感じた。1996年に、らい予防法が廃止され、療養所で元患者がどんな生活をしていたのか明るみに出始めた。中高生の回答に、病気が治っても療養所にいなければならなかった人に生きていく意味はないのか、という疑問が生じた。その後、多磨全生園の元患者と出会い、「あん」につながった。



パリで講演をした際、サイン会で10歳の長男を亡くしたお母さんがいた。毎日泣いていたが、「あん」を読んで心が楽になったと、お礼を言いに来てくれた。

私が刺激を受けたのはディッケという宇宙物理学者だ。もし宇宙に意識を持った生き物がいなかったら、宇宙があることを証明することはできない、と言った。

どんなみじめな人も、どんなに健康を害した人も、重度の障害でベッドから起き上がれない人も、皆この世と不可分であり、この世を背負っている。その連続がこの宇宙だ。

(要約 柵木真也 昭59政経、写真上、講演する助川氏)

元気はつらつ！同好会

【女性の会】代表 山田和子(副会長、昭49文)

桜満開の中、「あん」の舞台、多磨全生園を見学



3月31日、「女性の会」春の散策として東村山市にある多磨全生園を訪問しました。参加者は6人。広い敷地内の大木の桜は満開、見事でした。せめて桜の木は自由にさせたいとの入居者の思いから枝の剪定はされず、伸び伸びと育てられてきました。木の下から見上げると、躍動感にあふれた枝のさらに上まで空に溶け込むように桜が咲いていました。

ピクニックランチを楽しんだ後、ハンセン病資料

館を見学。入居者は終生隔離され悲惨な現実があったことを知りました。全ての仕事の担い手は入居者自身、定員8人の狭い雑居部屋、通い婚、断種・中絶手術、監禁室など、そこは強制収容所でした。

昭和30年頃には治療薬が出来、回復者は外に出られるようにはなりました。しかし「らい予防法」が廃止されたのは1996年。40数年もの長い間放置されていました。

現在約150人の回復者が全生園で暮らしています。介護の人と散歩中の車椅子に乗った回復者とすれ違いました。穏やかに挨拶される姿に少し救われた気がしました。

ドリアン助川氏原作、映画「あん」の舞台の一つ、食事処「なごみ」で餡入りアイスクリームを食べて帰路に就きました。

参加者(敬称略) 天野凡子、宇野良子、琴天音(府中校友会)、戸坂千香子、濁川マサ、山田和子

元気はつらつ！同好会**[ワングル同好会]**

代表 石倉毅(昭36理工)、天野凡子(昭56文)

昨秋台風の影響で中止・再挑戦、「江の島の旅」

2018年4月22日（日）、春のワングル企画として江の島に足を伸ばしました。昨年晩秋に計画したところ台風21号の被害の復旧工事のため行楽客等の島内立ち入りが禁止されやむなく中止。今回その解禁を待って、ようやく実施できました。当日は晴天で海から吹く風は湿度も低く快適な行楽日和。参加者は10人、朝9時に京王線調布駅に集合、電車を乗り継いで小田急線「片瀬江の島」で下車。

江の島に渡る前に、日蓮宗霊蹟本山「寂光山龍口寺」へ。ここは元刑場跡で、「日蓮が幕府を批判したためここで処刑されそうになったが、難を逃れて佐渡へ流された」の伝えがあります。毎年9月には「龍ノ口法難会」が盛大に行われている由。島に渡り、昼食後 仲見世通りから島巡りを始める。神社が4カ所、屋外にエスカレーターが4基、句碑、歌碑、記念碑などが10カ所以上、波の浸食で出来た岩屋（立入り禁止）等々、ドーム球場並みの面積に種々の建造物が点在し、歴史を感じるとともに行楽客の多さも納得できました。

参加者（敬称略）天野凡子、石倉毅、石倉恵子、齊藤宗之、友部保子（鎌倉稲門会）、堀井時枝、堀内正之、堀龍之介、松野宏、山田和子

[語ろうアースカフェ] 代表 山田和子**ロシアの食文化講座スタート、聴講者が63人も**

5月13日（日）、語ろうアースカフェ主催第1回「ロシアの食文化講座/東スラブ民族の時代～ロシア帝国の終焉（9世紀～20世紀初期）」が開催されました。聴講者は計63人。盛会でした。講師のクジメンコ・ボリスさんは流暢な日本語で、食文化がロシアの歴史の変遷に伴い如何に変化していったかをクイズを交えながら分かりやすく解説。実に内容の濃い2

時間の講義でした。

9～16世紀、小国の時代は、正教の教えに則り、切らずに食材そのままの形で、また同じ種類は混ぜず、ペチカの熱で煮る、蒸す、焼くが主流でした。16世紀半ば～17世紀、ロシアの拡大によりタタールの食文化の影響を受け、17世紀後半、ロシア帝国誕生により、西洋化し、食材のみじん切りやコンロでの直火の調理が普及していきました。1812年、ナポレオン軍との祖国戦争を契機に愛国主義が芽生え、ロシア料理を見直し復元。新たに混ぜる料理（サラダ）も登場しました。20世紀に入り蕪に代わり、じゃが芋料理が普及しました。

今回は6月3日（日）「ソ連時代の食卓～ロシア連邦の現代の食卓」。今回の講義内容を知った世界の郷土料理研究家数人から次回講座申し込みがありました。

キテネプロジェクト**AEDの実地訓練、参加者は真剣な眼差しで体験**

担当幹事 松野宏(昭43教育)

調布稲門会の活性化と会員の親睦を目的とする特別委員会「キテネ」では、2017年度の企画第4弾として2018年2月24日（土）に調布消防署つつじヶ丘出張所で「心肺蘇生術、AEDの最新知識と実地訓練」のイベントを実施しました。

当日は参加18人、調布消防署から施設、教材、説明の全面支援をして頂きました。まず説明（座学）では、配布された東京消防庁作成のテキストに沿って、心肺蘇生、人工呼吸、AED（自動体外式除細動器）による除細動（電気ショック）や気道異物除去、止血などの話があり、じっくり時間をかけて学ぶことができました。（写真下、実地訓練の合間に記念撮影）



そして心肺蘇生、人工呼吸、AEDの実地訓練では、床に置かれた4体の人体ダミーに一人ひとりないしは二人一組になって側面から腰をかがめ、まず各自が「どうしましたか」、「誰

か来てください」、「あなたは119番通報して下さい」などの声をかける方法を学習。次に心肺蘇生では胸骨の心臓の真上の位置に両手を組んで置き、体重をかけて速いピッチで30回押し、そのあと気道を確保しマウスピースを使って息を2回吹き込む人工呼吸の訓練をしました。実際は何らかの応答やしぐさが現れるまで、ないしは救急隊員に引き継ぐまで繰り返してこれをします。AEDでは装置の音声指示どおりに人体ダミーの左、右胸部2カ所に電極パッドを貼り、傷病者に誰も触れていないことを確認して電気ショックのボタンを押す操作を学びました。

事故や突然の心肺停止などは誰にでも時、場所を選ばずして起きるものです。都内では救急車を呼んで到着するまで平均7~8分かかるそうです。参加者はこの7~8分がいかにか

会員のエッセー

特別の想いを込めて——私の3度目のホノルルマラソン

伊藤悦子(昭49文)

毎年12月の第2日曜日にハワイで開催される「JALホノルルマラソン」。昨年末、私は3度目の大会に特別の想いを込めて参加しました。主役は3人。初マラソンに挑戦する私の親友、森美恵子さん(高校、大学時代のテニスペア)、2度目の挑戦の夫、伊藤晴邦、そして私。私の初挑戦は6年前の12月。4月に定年退職した還暦記念にと思い立ちました。2年後の2日目には夫もチャレンジ、足裏に問題を抱えた中での完歩でしたし、私も大幅な記録ダウンでのゴールと、やや不本意な内容でした。

さてその4年後の昨年正月に私の心に浮かんだ、ある“夢”。それはまだ現役で仕事をしている運動不足の親友にホノルルマラソンでゴールしてもらうこと、でした。彼女は私たち夫婦が母の介護をしていた数年間を親身に支えてくれ、母亡き後も家族同様に我が家で年末年始を過ごしており、私の夢が3人の目標になりました。彼女は超多忙の合間を縫って練習会や合宿に参加、一方夫は動脈硬化の悪化で9月にひざ裏の血栓除去手術、そのあと本人の懸命なリハビリで医師を説得して完歩を目標に。さらに私は私で本番の3週間前の自転車転倒事故で左ひじを2針縫う試練、...

そして三人三様で迎えた本番では、親友は不安が残る中、懸命に歩き、走り、ゴール。私も不安がある

の人の生死を決めることになるかを学びました。百戦錬磨の説明スタッフには3時間にわたって精力的に対応して頂きました。参加者からの質問も続出して、説明担当者曰く、こんなにたくさん質問をもらったことはなかった、ということでした。

終了時には説明スタッフに参加者から盛大な拍手が一度ならず二度も送られ、関係者全員に満足の笑顔が見えたところでこの日のお開きとなりました。

参加者(敬称略) 五十嵐眞、石井宏和、石井長子、石倉毅、石田欽也、潮田健太郎、岡田文男、佐藤雄司、高原浩、坪井貞光、直木純二郎、舟久保賢一、堀龍之介、松野宏、松野房子、松村啓之亮、松村葉子、涌田みちる、

中、何度か休憩しつつも「歩かず笑顔」で走り続け、記録ダウンも初マラソンの彼女より先にゴール出来ました。特筆すべきは夫で、順調に9時間目標で歩いていたところ、同じクラブの70歳の女性に追いつき一緒に歩くことに。彼女は身体が傾きメディカルチェックにも止められながらも夫のリュックの紐を持って2人で12時間かけてゴールしました。警官とスタッフの方々に「グッドジョブ！」と迎えられたことは感動ものでした。(写真下、完走後の3人、中央筆者)



目標を達成して3人で迎えた年末年始。私たち夫婦は新たな目標にオリンピックイヤーのホノルルマラソン参加、と定め、夫は身体を作り、今度は走ってみたいと闘志を見せる。親友はまだ空っぽの心で、参加できるかはわからない。いずれにせよホノルルマラソンは私たちの絆を強めた大きなイベントになりました。

トピックス・短信・お知らせ**◇盛会だった新年会、総勢54人が出席**

副会長 石井宏和(昭45商研)



2018年1月27日(土)夕、恒例の新年会がいつもの調布クレストンホテルで開催されました。ゲストに長友貴樹調布市長をお迎えし、元市長の吉尾勝征会員とそろい踏みでご参加頂きました。今年も総勢54人が出席する盛況ぶりでした。

私が初めてこの新年会に出席した昔を思い出しましたが、当時交代したばかりの長友新市長と吉尾旧市長のお二人が仲良く出席されておられた。以来10余年、私の記憶では新年会には結構、お二人ともご出席頂いている。有難いことです。卒業年度の古い先輩会員の出席率が高いのも新年会の特徴ですが、年の初めに、ずっと変わらぬ老舗のホテルで、美酒を酌み交わし、肩を組んで「都の西北」を唄ういつものパターンが気に入って頂ける理由かもしれません。また平成の卒業生や現役大学院生ら若者や幼い子連れのパパ会員の姿もあり、いつもながらの賑やかな催しとなりました。

さて新年会では冒頭に岡田調布稲門会会長が「今年は調布が町田稲門会とともに東京三多摩支部大会の主幹幹事稲門会となる重責を担う年。皆さんのご協力を是非お願いしたい」と挨拶して宴に移りました。昨年のカニ山芋煮会に参加されたのを機に当会に入会された5人の方をはじめ新会員6人も全員出席して下さり、順に紹介されて注目を浴びました。一昨年の芋煮会での新入会員の方からはすでに稲門会幹事としてご活躍頂いている方もおられ、今後の新会員のご活躍も大いに期待されるところです。

今回は岡田会長の挨拶にもあったように秋の東京三多摩支部大会を成功させなければならない大事な年の新年会。宴の締めくくりはそうした決意も新たに、先輩会員から新入会員まで全員で高らかに校歌を斉唱して閉会しました。(写真上)

◇春の多摩川クリーン作戦 幹事 関口憲三(昭44商)

2018年4月8日(日)午前8時から、調布市主催による恒例の多摩川クリーン作戦に参加しました。昨年と違い好天に恵まれ、調布稲門会から岡田会長をはじめ13人、調布三田会からも河村会長を含め5人の参加者となりました。リトルリーグなどの少年たちや、各自治会会員など多数の参加で河川敷は見違える様にきれいになりました。

終了後、参加者は多摩川土手から桜堤通りを散策し、京王多摩川駅前の福祉作業所が運営する「カフェ大好き」でお茶会を催した。三田会会員を交え15人と盛り上がり、新たな交流を図ることができました。

参加者(敬称略) 青木一夫、芦沢友雄、天野凡子、石倉毅、岡洋一郎、岡田文男、関口憲三、相馬友子、坪井貞光、直木純二郎、坊野美代子、堀井時枝、森本祐幸、(お茶会のみ明石純一)

◇新会員紹介 (敬称略、氏名、卒年・学部、入会順)

[正会員]直木純二郎(昭42法)、伊藤一(昭49教育)、石井光二(昭48理工)、廣田幹雄(昭47理工)、大塚久久(昭55法)

◇語ろうアースカフェ主催「ブラジル講座」

**サッカーとサンバを超えるブラジル/多文化共生の進んだ大陸のよ
うな国を再発見しよう!**

第1回2018年10月13日(土)午後2時~4時(以下時間は同じ)

オヤボケからシュエイまで—ブラジルの地理、歴史、基本情報—

第2回2018年11月17日(土) ブラジル文化の多様性を学ぼう—

ブラジルのポルトガル語の特徴と多様な観光地の美しさ—

第3回2019年1月12日(土) ブラジルの現在の状況と国際関係—

政治的・経済的な時事問題及び隣国との関係—

第4回2019年2月16日(土) ブラジルに旅するなら知るべき!—

社会や文化に関することをブラジル人の目線から学ぼう—

会場=調布市文化会館たづくり8階映像シアター、参加費=1,000円

(学生無料)、講師=ファベロ・ソウザ・タイスさん(早大国際コミュニケーション研究科博士課程2年)。

申込み・問い合わせは山田和子まで(電話・FAX)042-488-0741

(Email) kazuko.yamada@jcom.home.ne.jp

年会費振込先のご案内 (口座名「調布稲門会」)

ゆうちょ銀行 当座 00120-8-101851

みずほ銀行調布支店 普通 0997965



初の公開講演会、定員200人のほぼ満席、会場は熱気に包まれました。(2018 総会・ドリアン助川氏講演会で、五十嵐眞会員撮影)

<編集後記> 2014年1月号(第39号)から会報の編集を引き受けて、今号(第48号)でまる5年、区切りの10号目となりました。毎号、巻頭特集は稲門会活動の活性化に合わせて、躍動する活動の中からテーマを選び、その最前線の話をお会員の皆さんにご紹介するよう心掛けています。さて今号では「福祉ボランティア」活動を取り上げました。テーマは少々堅いかもかもしれませんが、入門編という感じで専門家である坊野さんに分かりやすく書いて頂きました。総会でのドリアン助川氏の講演内容も、弱者の側・視点から「生きる」という意味、そして人間とは何か、を問うもので、巻頭特集と相通じるものがあるのではないかと、思います。(高原浩 記)

<p>深大寺そば 創業文久年間 ご宴会・俳句会・御法事 元祖 嶋田家 住所 〒182-0017 東京都調布市深大寺元町5-12-10 電話 042-482-3578 FAX 042-499-6655</p>	<p>早稲田大学商議員 調布稲門会 会長 岡田文男 自宅 〒182-0011 東京都調布市深大寺北町6-8-13 電話 090-1819-5619 メールアドレス: fumi3248@akane.waseda.jp</p>	<p>林建設株式会社 取締役社長 林 清一 住所 〒182-8512 東京都調布市小島町2-56-3 電話 042-486-1111 FAX 042-486-1120</p>
<p>旭化成建材(株)指定工事店 外壁塗装・屋根塗装 株式会社住まいるスズキ 代表取締役 鈴木光孝 〒182-0023 東京都調布市染地3-5-65 電話 0120-080-242</p>	<p>株式会社パルコ 調布店 店長 田中雅之 住所 〒182-0026 東京都調布市小島町1-38-1 電話 042-489-5010 FAX 042-440-7665</p>	<p>イベント・パーティー (株)正直屋グループ 住所 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-7-10 電話 03-3853-1171 FAX 03-3853-1493 http://www.shojikiya.co.jp/</p>
<p>相続を争族にしないために、 公正証書遺言をお勧めします。 行政書士堀内綜合法務事務所 行政書士 堀内正之 〒182-0035 東京都調布市上石原3-12-8 電話・FAX 042-499-1300 HPは「調布 行政書士 堀内」で検索</p>	<p>本格カレー&ダイニング M's Kitchen エムス キッチン 住所 〒182-0024 調布市布田4-2-7 ホテルノービス調布1階 電話 042-444-2185 調布駅1分 飯野病院西側 月曜日定休</p>	<p>宿泊・宴会・婚礼 調布クレストンホテル 住所 〒182-0026 調布市小島町1-38-1 調布バルコ8~10F 電話 042-489-5000 FAX 042-489-1106 http://www.crestonhotel.jp</p>
<p>早稲田大学賛助商議員 調布稲門会 顧問 元木 勇 自宅 〒182-0003 調布市若葉町2-22-10 電話 03-3300-4554 FAX 03-3300-8728</p>	<p>新しい食文化を創る 株式会社山田屋本店 代表取締役社長 秋沢淳雄 住所 〒182-0024 東京都調布市布田2-1-1 電話 042-482-4585 FAX 042-482-4572 http://www.okomekan.net/</p>	<p>早稲田大学商議員 調布稲門会 顧問 椎原大典 自宅 〒182-0022 東京都調布市国領町8-2-9 ライフタウン国領1-426 電話・FAX 03-3430-4338</p>